



図41 木造十一面観音立像

胸の前に蓮華をさした水瓶をもつ左手を置き、右手は垂れ下げられている。外に向けられた掌は施無畏の印を示している。この穏やかさにあふれた観音像は肩部の墨書紀年銘から一〇六九（延久元）年に造立されており、像高四九八センチをはかる曲尺の丈六仏になる。松材の寄木造で、大仏師暹明の作。地方仏とは思えない作風で、観世音寺諸尊像のなかの白眉である。この造像に際して、造仏のために資金などを提供し、仏縁にあずかるうとして府老王則宗ら数十人が結縁している。この結縁者の名簿にあたるものが菩薩像の体内に墨書されているが、ほとんどが僧および官人とその一族（藤原・橘・平・物部・秦・伴・大中臣・清原・安曇など約二〇氏）で、なかには妙令、坂井女などの尼僧の名もみえる。

木造馬頭観音立像 重要文化財（図42）

最近、馬頭観音の人氣が高いらしく、この馬頭観世音菩薩もその例にもれない。松材の寄木造で、像高五〇三センチをはかる馬頭観音中最大の巨像として知られる。大仏師真快・明春らの作。一一二六―一三〇年（大治年中）に大宰大貳藤原経忠によって造立されたという伝承をもつ。丈六仏の四面



図40 木造聖観音坐像

ろか曲尺でみても一丈を超えており、周尺にすれば丈六に近くなる。体内の墨書銘によれば一〇六六（治暦二年）に造立されており、平安時代後期の典型的な作例である。作風が次の十一面観音立像に近く、制作年の近さを考えると、その作者である大仏師暹明かあるいは同じ工房での作と思われる。体内に僧と藤原重友の「父母成仏為」とする趣意の墨書があり、そのほかに貞円・正寿などの僧や平邦氏・紀為延・藤原正国などの大宰府の官人と思われる人名があり、この聖観世音菩薩坐像が多く僧俗の結縁によって造像された事情をうかがうことができる。

木造十一面観音立像 重要文化財（図41） 頭部に十一面を付ける十一面観音は古代に普及した観音で、一一の顔面つまり数多い明晰な頭（頭脳）で衆生を悩みや障害から救ってくれる。

聖観世音立像とともに本尊として敬っている。聖観音は、大慈大悲の心で衆生の悩みや苦しみを取り除き安樂を与えていただく、観音菩薩の基本になる。松材の寄木造で、坐像ではあるが像高三二一センチをはかる。五〇センチを超える他の立像に比べれば像高が低い、坐像は丈六立像の半分になることからすればこれもまた丈六の巨像である。それどころ